

ある夜の羊飼いたち

ルカによる福音書 2 : 8 - 15



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年12月24日

降誕日前夕

京都聖三一教会にて

今夜、2000年前のベツレヘムの夜の野原に近づいてみたいと思います。

「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。」ルカ 2:8

羊飼いたちは今夜も羊の群れを守って番をしています。それはずっと以前から、数百数千年続けてきたことです。大事な1匹1匹からなる羊の群れ。穏やかな日も、焼け付く夏も、嵐の日も、ずっと群れを守り続け、養い続けてきたのです。そうして彼らは救い主を待っていました。

わたしたちの読む聖書には「**羊の群れ**（の番をしていた）」と書いてあるのですが、元の聖書（ギリシア語）を見ると、「**彼らの群れ**」と書いてあります。「**彼らの群れの番をしていた**」。「大事な自分たちの羊の群れ」「自分たちが責任を持つ群れ」なのです。今日も明日も、明後日も、ずっとその大切な群れを守り続けていきます。

彼らの生活の土台とリズムをなしているのは礼拝、祈りです。群れを常に守っていなければなりませんから、揃って町の礼拝に行くことはできません。しかし毎日、朝に夕に、羊飼いたちは祈り続けてきました。詩編はそらんじています。

「主はわたしの牧者、わたしは乏しいことがない」詩編 23:1
「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの力、悩むとき
の変わらぬ助け」詩編 46:1

いつもと変わらない、冬の、ある夜のベツレヘムの野原。し
かしこの夜、事件が起こります。

「主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼ら
は非常に恐れた。」ルカ 2:9

主の天使が羊飼いたちのところに来て、立ちました。主の栄
光、神の輝きが羊飼いたちとその周りを照らしました。聖なる
光を浴びて、彼らは非常に恐れました。尊い存在、神がここに
おられると感じておののいたのです。

天使は彼らに言いました。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告
げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生
まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、
布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つける
であろう。これがあなたがたへのしるしである。」

続きも読みましょう。

「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美し

て言った。

『いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心にかな適う人にあれ。』 2:10-14

空は無数の星。その星のすべてが生きて輝き、天使と共に歌いました。

「いと高きところには栄光、神にあれ」

人が栄光を自分のものにしてしまっているなら、それは大きな間違いです。人間が自分の名前を輝かせようとするのは愚かです。栄光はローマ皇帝ではなく神にあれ。

「**栄光は神にあれ**」。神の愛の輝きが天に満ちています。

そして天使と天の大軍は祈り歌います。

「地には平和、御心にかな適う人にあれ」

「み心にかなう人」というのは特別立派で正しい人ということではありません。「神の喜びである人」「神が喜んでくださる人々」。それはすべての人です。わたしたち皆のことです。そして、あの羊飼いたちがそうであったように、何か責任や課題を負って労苦している皆のこと、わたしたちのことです。

平和が地上のあらゆる人々にあるように。平和のない地上に平和をもたらそうと切に願って、天使が歌い祈っています。

天の大軍、天使の合唱が響いたとき、ベツレヘムの野原は天国でした。そこには神の愛の光が満ち、平和が満ちていました。喜びと祝福が満ちていました。羊飼いたちの恐れは希望に変えられます。何かが起こったのです。天使が告げました。

「今日、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」

天使が去って、元の静かな夜の野原になったとき、羊飼いたちは言いました。

「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」 2:15

羊飼いたちは救い主を探しに出かけて行きます。すでに羊飼いたちの新しい人生が始まっています。救い主に望みを置く人生、希望の人生です。

「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」 2:16

そのとき、羊飼いたちは平安と喜びと慰めに満たされました。この方を待っていたのです。

幼子イエスは、探し当てられるのを待っておられます。わたしたちが幼子イエスを見出すのを待っておられます。そして救い主イエスは、すでにわたしたちを見つけておられます。

わたしたちもベツレヘムの羊飼いたちに声を合わせましょう。

「主はわたしの牧者、わたしは乏しいことがない」詩編 23:1